様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：１４６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１３１６９

研究課題名（和文）移民学習論の再検討ー「残留日本人学習」の教材開発を通してー

研究課題名（英文）Reconsideration of Migration Studies Theory :Through the Development of Teaching Materials for "The Left-behind Japanese Learning" -

研究代表者
太田　満（OTA, Mitsuru）

奈良教育大学・社会科教育講座・准教授

研究者番号：８０８０４３８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，国際理解教育研究の成果を手掛かりに，残留日本人の歴史や体験を取り上げた教材開発を行った。残留日本人については、中国やサハリン、フィリピンに在住する、あるいは日本に帰国した人々を対象にインタビューを行い、彼らの生活体験の教材化を行った。教材開発では、既存の移民学習実践を分析し、その課題を明らかにした上で、残留日本人学習の目標や内容、方法を検討し、授業開発を行いその意義を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では，国際理解教育研究の成果を手掛かりに，残留日本人の歴史や体験を取り上げた教材開発を行った。国際理解教育研究では，「人の移動」に関する教材開発がなされているが，「人の移動」については，「移動した（する）人」と同様，「移動できなかった／できない／しない人」にも着目すべきだと考える。戦後の残留者の経験は重要な学習内容であり，残留は移民学習のキーコンセプトの一つとして位置づけられるべきと考える。残留日本人学習は，国籍も民族も異なる多様な社会を生きてきた人々の経験と，国内外に広がる家族の様子を取り上げる点において，国民国家を基本枠組みとした教材とは異なる教育的価値を有する。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop teaching materials that enables us to take into consideration about the histories and situations of the Left-behind Japanese with a focus on International Education. In this study, I interviewed the Left-behind Japanese in China, Sakhalin, and Philippines not only who lives over there and also who have returned to Japan, and converted their life experiences into teaching materials. In this study, I analyzed and clarified the problem of existing migration studies, and examined the goals, contents, and method of Left-behind Japanese learning, and developed the lesson plans, and verified the significance.

研究分野：国際理解教育

キーワード：中国　サハリン　フィリピン　残留日本人　帰国者　生活体験　教材開発　授業実践

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

移住・移民をテーマとする学習は多文化教育の中で早くから提唱されてきた。アメリカの多文化教育の第一人者である J.A.バンクスは，エスニック集団の移動に関する概念（移住，移民）を多文化カリキュラムのキー概念の一つとして位置づけている。また，日本国内の移民学習については，森茂岳雄・中山京子編『日系移民学習の理論と実践―グローバル教育と多文化教育をつなぐ―』(明石書店，2008 年)，森茂岳雄・中山京子著「移民学習論―多文化共生の実践にむけて」（日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房，2011 年)、森茂岳雄・中山京子著「『人の移動』(1)－移民－」（大津和子編『日韓中でつくる国際理解教育』明石書店，2014 年）などの優れた先駆的研究がある。だが，これらはハワイやブラジル、アメリカなど太平洋諸島や南北アメリカ大陸に渡った「日系移民」を中心とした学習論であり，大日本帝国圏内の人の移動や戦後に残留した人々の事例は課題として残されていた。

２．研究の目的

本研究の目的は，中国や樺太（サハリン）等の残留日本人を取り上げた学習（以下「残留日本人学習」）の意義やねらい，内容や方法を明らかにし，移民学習の在り方を再検討することである。具体的には既存の移民学習論を手がかりに残留日本人学習に必要な教材を開発し，移民学習論の中に新たな意義を見出すようにする。また，教材開発を通して普及可能な資料を生み出し，小・中学校の教育現場に貢献できるようにする。

３．研究の方法

まず，移民や残留日本人を取り上げた先行研究（実践）の分析を通して，残留日本人学習の意義や方法を検討する。次に，残留日本人に対するインタビュー調査等を行い，生活体験の語りやそれに関わる写真や資料等を収集すると共に，移民・移住に関わる歴史的遺構等を調査し，教材化を図る。その上で残留日本人学習の授業開発を行い，実践結果を踏まえてその意義を検証する。

４．研究成果

(1) 残留日本人学習の意義

残留とは「境界変動によって，国民国家主義の基準から自身が属するべき国家の主権が存しない領域から主権の存する領域への移動が制限され，その領域内での居住を継続すること」（中山 2019：104-105）であり，残留日本人とは，残留現象によって生じた日本人のことである。第二次世界大戦後に残留日本人を生み出した地域は，中国やサハリン（樺太），フィリピン，インドネシア等にまたがる。

これまでの移民学習は，人が移動することを前提にされ，残留体験やその歴史を踏まえたものになっていなかった。我々の社会で起こる人の移動は，「自ら進んで移動する／仕方なく移動する／強制的にさせられる」こともあれば，「移動しない／移動できない」という側面もある。社会の現実をよりよく捉えようとした時，人の移動は，「移動した（する）人」と同時に，「移動できなかった（しない）人」にも着目すべきであろう。

サハリン残留の場合，多くの日本人女性は朝鮮人男性と結婚し家庭を築いている。異なるルーツをもつ夫婦はソ連社会の中で複合文化的な家族を形成し，居住空間はサハリン，日本，韓国，北朝鮮にまたがる。国籍や民族の異なる人々の経験や国内外に広がる家族や社会の様子を取り上げる点において，残留を取り上げた教材開発は，国民国家を基本枠組みとした相互理解のための教材とは異なる教育的価値を有する。

(2) 残留日本人学習のねらい

残留日本人学習のねらいは五つある。一つは，「終戦」や「戦後」を問い直すことである。二つは，残留日本人の殖民・戦争・残留体験や帰国後の暮らしを考えることである。三つは，残留日本人の養父母について考えることである。四つは，残留朝鮮人について考えることである。五つは，国籍やアイデンティティ，国境（境界）の変動，平和な社会について考えることである。なお，これらのねらいは一回の学習，一つの単元で全てのねらいが達成されるものではなく，学校種や対象学年等によって，力点や学習目標・内容が変わるものである。

(3) 残留日本人学習の内容

残留日本人学習は残留体験の位置づけによって以下二つの学習内容に分類される。一つは残留日本人の生活体験「について」学ぶ学習である。もう一つは，残留日本人の生活体験「を通して」学ぶ学習である。前者は，個々の体験を知り，中国やサハリンにおける戦争中や敗戦下，残留中や帰国後の暮らしについて理解するための学習である。後者は，個々の体験を通して，残留の歴史的背景や今日的課題など北東アジアの過去や現在について考えるための学習である。無論，両者は明確に区分できるものではなく，学習内容として重なることもある。

（4）残留日本人学習の方法

学校教育において、残留日本人の体験に学習者が迫る方法は四つある。一つは，体験を直接に聞く方法である。二つは体験を間接的に聞く方法である。三つは記念館を訪れる方法である。四つは教員が授業（単元）をつくることである。

①体験を直接に聞く

体験者から直接に聞く場の設定は二つある。一つは教員が設定して体験者を教室に招き，児童・生徒が体験者の話を聞くことである（教員設定型）。もう一つは児童・生徒が自ら体験者を探し出し，体験者の話を聞くことである（生徒探求型）。

②体験を間接的に聞く

体験を間接的に聞く方法は，四つある。一つは，生活体験を記した記録を読むことである。二つは，生活体験を語る動画配信資料を活用することである。三つは，次世代の語り部に語ってもらうことである。四つは，学級担任や教科担任が伝えることである。換言すれば，一つ目と二つ目は体験者が発する言葉で体験を間接的に聞く方法であり，三つ目と四つ目は体験者以外の人間から体験を聞く方法である。

③記念館を訪れる

一例として，長野県下伊那郡阿智村に満蒙開拓平和記念館を挙げておきたい。同記念館は，満蒙開拓に特化した民間運営の記念館で，2013 年 4 月に開館した。同記念館では，理念として「全国で最も多くの開拓団を送出した長野県南部に『満蒙開拓』に特化した記念館を設置し，歴史・資料の記録・保存・展示・研究を行い，後世に正しく歴史を伝えるための拠点」とすること，「満蒙開拓語り継ぎ活動の拠点，残留邦人の交流の場として，さらに日中友好事業活動等に寄与しうる拠点施設」とすること，「戦争，そして多くの満蒙開拓移民を送り出した〈負の歴史〉から，アジア・世界に向けた『平和・共生・友好の未来』創造への発信拠点」とすることを掲げている。

④授業（単元）をつくる

授業（単元）をつくる方法は大きく二つに分かれる。一つは，残留日本人の生活体験について学ぶ学習である。もう一つは，残留日本人の生活体験を通して学ぶ学習である。

前者は，一つの方法として教科書記述の活用が考えられる。例えば小学校の社会科教科書には「満州にソビエト連邦（ソ連）軍がせめこみ，やがて樺太南部，千島列島にもせめこんできました。8 月 15 日，日本はついに降伏し，アジア，太平洋の各地を戦場とした 15 年にもわたる戦争が，ようやく終わりました」とある。「満州へ移住した人々」「満州移住をよびかけるポスター」の写真を示しながら，「満州に移住した人々は 8 月 9 日以降，どうなったのだろうか」「8 月 15 日には戦争は終わったのだろうか」と発問をする。その問いについて，子どもは考え，体験談を聞き，最後に感想を交流しまとめるのである。あるいは，予想し，各自で調べてみて，その上で体験を聞き，感想交流しまとめる，という方法もある。

以上の学習展開は基本的には，「つかむ」，「調べる」，「まとめる」の単元づくりであり，小学生以上であれば実践できる方法である（図 1 参照）。

学習過程	つかむ	調べる	まとめる
指示・発問	満洲に移住した人々は 8 月 9 日（あるいは 8 月 15 日）以降，どうなったのだろうか	○○さんの体験を聞いてみよう	○○さんの体験を聞いて思ったことをまとめよう

図 1　中国・サハリン残留日本人学習における単元をつくる方法の例

次に，後者の残留日本人の生活体験を通して学ぶ学習についてだが，要点は 3 つある。一つは，生徒が学びたいと思うような導入の工夫，とりわけ学習課題の設定である。二つは，学習過程の工夫である。残留日本人の生活体験を追究する中で，中国人養父母や朝鮮半島出身者が登場する。それらの人物に焦点を当てたり，残留日本人の心情と重ね合わせたりしながら，残留に関わる歴史に目を向けられるようにすることである。三つは，写真資料や動画資料等を効果的に活用し，学習のイメージがもてない生徒への支援をしていくことである。

以下に，中国残留日本人を取り上げた授業事例を紹介する。ここで紹介する事例は，「体験を直接に聞く」，「授業（単元」をつくる）」方法を採用し，残留体験だけでなく，移民（植民）の経緯についても取り上げた授業構想である。なお，学習内容・方法については，対象学年（小学生から高校生を想定）に応じて弾力的に運用するものとする。

１）授業名「満州移民と残留」

２）授業目標

満洲移民に関心をもち，敗戦前後の戦争被害や残留者の残留中や帰国後の暮らしについて調べ，戦後日本人の引揚げが遅れた理由や，中国に残留・定住した朝鮮人の歴史について理解し，戦後日本人の移動が制限された要因や残留が及ぼした影響について考える。

3）単元構成

単元は九つのパートで構成される（各パート１時間，聞き取り調査については各４時間，計15時間である）。一つ目のパート「満洲移民と中国残留」では，満洲移民や中国残留に関心をもち，「満洲に多くの日本人がいたのはなぜか。満洲にいた日本人は，戦後どうなったのか」という問題意識がもてるようにする。二つ目のパート「満洲移民送出の背景と満蒙開拓団」では，満蒙開拓が国策として進められた背景や，ソ連参戦後に満蒙開拓団がどのような問題に直面したのかを考えられるようにする。三つ目のパート「聞き取り調査①」では，敗戦当時満洲にいた人から聞き取り調査を行い，当時の様子が分かるようにする。四つ目のパート「中国人養父母」では，中国人養父母はどのような経緯と心情で日本人の子どもを育てたのかが分かるようにする。五つ目のパート「中国残留日本人」では，なぜ中国に残留者が出たのかについて考えると共に，「中国帰国者は，戦後の中国をどのように暮らし，帰国後はどのように暮らしたのだろうか」という問題意識がもてるようにする。六つ目のパート「聞き取り調査②」では，中国残留日本人から聞き取り調査を行い，中国残留中や帰国後の様子が分かるようにする。七つ目のパートでは，中国帰国者２世，３世を取り上げ，それぞれが抱えている課題について考えられるようにする。八つ目のパートでは，中国残留（定住）朝鮮人を取り上げ，朝鮮人が中国に残留（定住）することになった背景が分かるようにする。九つ目のパート「まとめ」では，中国を事例に人が移動を制限される要因や残留が及ぼす影響について考え，これまでの学びを振り返る。

（5）残留日本人学習の授業開発

①小学校の授業実践

小学６年生を対象とする授業実践（社会科）を紹介する。研究協力者（島俊彦氏）が指導計画（全２時間）を作成し，2021年度に福岡県下で小学６年生を対象とする授業を行った。

１）授業名「サハリン残留日本人を通して考える世界平和」

２）授業目標

・サハリンの位置や歴史，残留日本人の存在及び残留の経緯や当時の生活の様子について調べまとめることを通して，サハリン残留日本人の事例と昨今のロシア軍によるウクライナ侵攻の事例に関連があることを理解する。

・サハリン残留日本人が残留を余儀なくされた理由を考えたり，平和な世界を築くためにだれがどのようなことをしたらよいかについて価値判断や意思決定をしたりして，それらを適切に表現する。

・日本にルーツをもつサハリン残留者の存在や昨今のロシア軍によるウクライナ侵攻の様子に関心をもち，意欲的に学習に取り組み，SDGsと関連付けて世界平和について考える。

３）授業展開（主な学習活動）

第１次「サハリン残留日本人」

１．児童の興味・関心が強いロシア軍のウクライナ侵攻を切り口に，サハリン残留日本人の存在を知る。

２．戸倉冨美さんの事例を調べることを通して，残留の経緯や当時の生活の様子などから，サハリン残留日本人が残留を余儀なくされた理由を考える。

第２次「これからの世界・まとめ」

１．戸倉冨美さん，降旗英捷さん・降旗婦美子さんの事例から，サハリン残留日本人の戦争に対する思いの共通点を考察する。

２．これからどのような世界にしていきたいか，また，平和な世界を築くために，だれがどのようなことをしたらよいかを考える。

３．SDGsとの関連も考慮して，本特設単元での学びを振り返る。

４）学習者の学びと実践の意義

授業後に児童が記した学習の振り返りは以下の通りである。一部を紹介する。

・私はサハリンはウクライナの状況ととても似ているなと思いました。戸倉さんも残留日本人だけど，ニュースで見た札幌で兄の帰りを待つ降旗さんも，どちらも同じ残留日本人だから，今ウクライナとロシアの戦争が起きていることはとてもいやです。 ・平和な世の中にするには，一人ひとりが今の世界について，現状を知ることが大切だと思います。 ・自分のできることを考えて行動できる人になりたいです。戦争のことだけではなく，みんなのことを考えて動ける人にもなりたいです。

本実践では，児童にサハリン残留日本人の存在に気付かせると共に，ウクライナ情勢に関心をもったり，不安に思ったりする児童に話し合いの場を設け，戦争のない平和な世界をつくるためにできることを考えさせることができた。

②中学校の授業実践

中学 2 年を対象とする授業実践を紹介する。研究代表者（太田満）が指導計画（全 2 時間）を作成し，2020 年度に奈良県下の中学 2 年生を対象とする授業を行った。

１）授業名「フィリピン残留日本人の体験と願い」

２）授業目標

・フィリピン残留日本人の体験を知り，フィリピン（ダバオ）での戦争と関連づけて考える。

・フィリピン残留日本人の無国籍問題について知り，自分の考えをもつ。

３）授業展開（主な学習活動）

第１次「フィリピン残留」

１．ハツエさん（フィリピン残留日本人）の今について話し合う

２．ハツエさんのライフヒストリーを読んで感想交流をする。

３．映画「日本人のわすれもの」を見て話し合う。

第 2 次「無国籍問題」

１．フィリピン残留日本人訪日代表団の願いやフィリピン残留日本人の国籍取得状況を知る。

２．フィリピン残留日本人の無国籍状況の原因を考え，話し合う。

３．残留日本人の無国籍問題に対してできることを考える。

４）学習者の学びと実践の意義

上記指導計画の一部を割愛した授業を経て，生徒は以下の感想を記述した。一部を紹介する。

・戦争が及ぼす被害は戦争中だけでなく，戦争が終わって何十年たっても，その人たちや家族の人たちは苦しんでいるのだとわかりました。私は，お話の途中で，どうして日本の国籍をとろうとするのかと質問しました。その質問で，先生の答えをきいて，どこにも国籍がなくて，自分が何者かもどこにも記されていないのはとても悲しいことだと思いました。

・私は，もっと残留日本人の人生を知って，残留日本人に対する支援に参加したいと思いました。自分の父親と会えないことは，自分が経験したことないほど苦しいことだと思います。その方に，少しでも心が幸せになるよう，よりそってあげたいです。

本実践では，生徒に戦争の「終わり」や無国籍問題について考えさせたり，残留日本人に対する支援に関心をもたせたりすることができた。

③中学校の授業構想

中学 3 年を対象とする授業構想（社会科公民的分野）を紹介する。研究協力者（吉田寛氏）が指導計画（全 2 時間）を作成した。

１）授業名「境界とアイデンティティ」

２）授業目標

・戦後，サハリン（樺太）に置き去りにされた残留日本人がいたという事実（存在）を，年表，地図，証言資料を通して理解する。

・歴史的経緯を経て現在のサハリンが，多文化社会であることを知る。

・「境界線の移動」「国際結婚」に伴って生じる社会状況の変化や影響を通して，「人々の移動」，「主権」「国籍」「アイデンティティ」について考える。

・境界の移動などを伴う国家間の紛争が引き起こす問題について，多様な視点（国籍の枠を越えた住民一人一人の生命や権利保障などの人道支援の観点）から考えることができる。

３）授業展開（主な学習活動）

第１次「動く境界線」

１．地図上で「樺太と千島列島が白色なのはなぜか」を，年表≪資料１≫を通して確認する。（地理的分野・歴史的分野で学んだことの復習）

２．南樺太は 1905 年～1945 年，日本が領有していたことを知る。

第 2 次「境界移動が引き起こしたこと」

１．境界移動によって，戦後，サハリンに置き去りにされた残留日本人が生じたことの原因を，引揚げ・帰国の推移や，残留日本人の証言資料をてがかりに，当時の社会状況から理解する。

２．「国境は何のためにあるのか」考えることをきっかけに，国境の移動に伴う影響を，国家の視点と住民の視点といった複数の視点でとらえなおし，主権や国籍，アイデンティティについて考える。

３．新聞記事を通して，現在のサハリンが多文化社会であることを知る。

４．境界の移動などを伴う国家間の紛争が引き起こす問題について，人道支援の観点など，多様な視点から考える。

【註】中山大将（2019）『サハリン残留日本人と戦後日本　樺太住民の境界地域史』国際書院

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 太田満	４．巻 69巻
２．論文標題 フィリピン残留日本人理解のための教材開発ー残留者のライフヒストリーに着目して―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 奈良教育大学紀要	６．最初と最後の頁 87,102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20636/00013381	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 太田満	４．巻 第17号
２．論文標題 サハリン残留・帰国者学習の教材開発―国際理解教育の観点から―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 共栄大学研究論集	６．最初と最後の頁 69，84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 太田満
２．発表標題 残留日本人の過去と現在を考える社会科学習 ―フィリピン残留日本人理解のための授業構想
３．学会等名 日本社会科教育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 太田満
２．発表標題 WITHコロナ時代の国際理解教育 ―「難民」を通して考える―
３．学会等名 韓国国際理解教育学会（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 太田満
２．発表標題 中国残留日本人の体験に向き合う授業づくり
３．学会等名 日本国際理解教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 太田満
２．発表標題 Possibility of the Development of Teaching Materials about Sakhalin for International Education
３．学会等名 The Korean Society of Education for International Understanding（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計5件

１．著者名 中山　京子、東　優也、太田　満、森茂　岳雄	４．発行年 2020年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 296
３．書名 「人種」「民族」をどう教えるか	

１．著者名 森茂岳雄、川﨑誠司、桐谷正信、青木香代子編	４．発行年 2019年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 298
３．書名 社会科における多文化教育　多様性・社会正義・公正を学ぶ	

１．著者名 太田満	４．発行年 2019年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 259
３．書名 中国・サハリン残留日本人の歴史と体験　北東アジアの過去と現在を次世代に伝えるために	

１．著者名 日本国際理解教育学会	４．発行年 2022年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 334
３．書名 現代国際理解教育事典	

１．著者名 太田満	４．発行年 2021年
２．出版社 アサヒビジネスサポート	５．総ページ数 33
３．書名 サハリン残留日本人の歴史と体験ーサハリン永住を決めた人々ー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	吉田　寛 (YOSHIDA Hiroshi)		
研究協力者	島　俊彦 (SHIMA Toshihiko)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関